
戦国basara！？ いや、けど性別が……

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国basara!? いや、けど性別が……

【Nコード】

N5036Z

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

『桐生 竜間』という男性が戦国basaraというのが好きすぎて、ファンとなってしまう。彼は思った『俺もbasaraの世界に行つて、大暴れしてえ』と。そんな彼はある日、目を覚ますと関西弁を喋る人が現れた……

プロローグ

「さっすが伊達だ……。無駄にカツケエのがムカつくが」

オツス！ オラ……じゃなくて、俺は桐生 竜間でーす！！

まあ、何となくこの小説の主人公職業でございます……って、何か今俺変な事思ったか？

ただいま俺は最近出た『戦国basara』っつー新しいのに夢中でしょうがねえんだ

俺もこういう技使いたいし、何か憧れる世界なんだよな

「しかし、何で今の日本はとっても嫌な時代になったんだろうな」

地球温暖化とか、地震とか……戦国時代にはもつと小説的みたいなのが起きたんだ

平和はいいが、それもそれで……

「俺も行きたいぜ。こういう二次元的世界に……つか、もし言ったら死ぬな、俺が」

ゲームを一旦止め、ベッドにごろんと横たわる

最近寝ていないからな、目がだんだんと閉じていく

そしていつのまにか俺は目を閉じ、夢の世界へと走って行った

「おまえさんかい！！ そんな夢も希望を持っているのは！！」

「……………へ？ あんた誰」

目を開ければ俺はベッドの上ではなく、机にちょこんと座っていた
そして目の前にはイケメンだが、多少俺に負けるが……俺の方が
アレだし？ アレだよ

「お前さん……。悲しくないんか」

「うるせえ！！ オタク的に言うと、『リア充氏ね』だ！！」

「ワイ、この数百年間彼女おらんで」

それはそれで、俺以上に落ち込んでいる誰かさん

俺より空しいな……。ん？ 数百年間？ は？ つか此処何処！？

「自己紹介がおくれたな。ワイは瞼つつーもんや。上司の命令で、
お前さんを連れてきたんや」

「瞼？ 上司？ 連れてきた？ ……は！？」

その時、俺の少ない脳みそでも理解できた

「お前……。まさか、誘拐犯か！？」

「……まあ、バカはほおつといて、話に進で」

「あれ？ 無視ですか。ああ、無視なんですな。いいですよ、どう
せ俺なんか女の子に無視され続け、最近妹からも無視され続けてい
るダメダメな下半身一度も使ったことがない男だから……」

「バカなのかアホなのか、わからんたってもうたわ。急にネガティブになって」

そういえば、妹が最近俺に冷たい視線向けてくるな……

あいつ彼氏できたって聞くし、はは。終わった。先越されたし

「実はうちの上司が、100年に一度人間の願いを一つ叶えるつーのがあるんや。それで、何とお前さんがその100年に一度叶えられる一人だけのラッキーボーイなんや」

「神よおおおお!!?? 何で俺をイケメンにしてくれなかったんだあああ!!!!」

「お前さんも一応顔はいいのに、そんな性格だからモテないんや。いいから聞け!!」

「え? 君そんな事言ってくれるの? いや、褒めてもなんもでねえよ そうだ、今度俺のお気に入りに 動画を見せてや」「じゃあかしい!!」「」

な、なんだよ急に……

カルシウム足りないんじゃないのか!? 牛乳飲め!! しかれば、カルシウム一杯取れるぞ

「はあ……はあ……。なんや、あの野獣みたいなお人やな。お前さんの願いはなんや。率直に問う」

願い……願いねえ

あ！？ アレならどうだ？ けど、叶えられるはずはねえーよな？

「俺を『戦国basara』に転生してくれ！」

「ほな、転生やと何かと付属的なのが付くんやけど……どないします？」

「んなのいるか！！ 俺はんなセコイ事はしねえよ……いいから、早くしやがれ」

さあ、これで俺の今の願望はかなう。大暴れしてやるぜ……

つか、その前に生きてられるかな？ 死んだら元の子もないぜ。ま、いいや

「さあ頼むぜ。瞼さんよおー」

「（変わったお方やな。あの獣代はんと違い、なんも力はないのに付属的なのをいらないやんて……）じゃあ行くで！」 桐生 竜間
ゼウスの承諾により、転生を許可する！！！！」

俺の周りが光り輝きだし、だんだんと風が強くなり始めた

そして竜巻が起こり出して、耳に聞こえるのは全部風の音

『バチ！！』

「！？ な、なんや！！ 陣に何故か傷ついておる！！ これは……

……！！！！」

「え！？ 何！？ あんか今、スンゲエ電気音みたいなのが聞こえたんだけど！！！？？ 心配ないよね！？」

「……………ドンマイ」

「ドンマイじゃねええええええええええ！！！！！？！？？」

そして、俺はそこから消えた

絶対あの瞼の奴、殺す。いや、殺されていいほど甚振ってやる……

…！！ 俺を怒らせたのだから

「オギャアアアアアアア！！！！（はい、お決まりのパターン！！！！）」

┌

俺は既に前までの姿ではなく、赤ん坊となっていた

俺を抱いて微笑んでいる女性と、それを見て笑っている男性

本当に、basaraの世界か？

プロローグ（後書き）

感想をください！

第一幕 俺が転生した所はかなり強者!?

おいっす！　ども、皆さんの心のアイドルを気取っている桐生
竜間でーす

苗字も名前も前のの同じで安心したけど……まあ、何というの？

両親？　が、何か凄いだよ？　俺が住んでいる所は『京』とい
う天皇が住んでいる所なんスよ

それが、何と俺ん家道場なんだよ。俺のパパ、パイロットみたいに
で……

「これ！！　どうした竜間！！　それじゃ、武将にもなれんぞ！！」
「うるせえええ！！？　俺は一応一般兵希望なんだよ！？　この腐
れ　野郎！！」

「たわけが！！　お前は『桐生家』の息子ぞ！！　代々家は、この
『恵まれた体』を使い、所々の大名達に身を置いたもんぞ！！　し
かし、お前にはそれはない！！」

きっぱり言いやがって……！！　パパ怖い！！

一応俺の親父『桐生　龍二』。『京』では最強と名乗っている、
頭がアレな親父だ

ん？　今俺は何しているかって？　会話文通り、ただいま

「修行なんぞこりこりだああああ!!??」

「サボるなバカもー！ーん!!!」

親父はかの有名な大 部長の如く、俺に怒鳴りつけた

見た目が20代なんて、ありえねえよ

あの髭!! 鼻下にある短い髭!! あれが語っているよ!!??

「いいから、ちゃんと修行せんかああああ!!!」

「ぎゃああああ!!?? 子供でもトラウマ生みそうな形相で、

俺に迫ってくるー!!?? こういう時は撤退だー!!!!」

脚を思い切り全開で働かせ、道場から俊足で出ていき市場へと出て行った

ちくしょー、あの糞親父。ぜってい顔にウ コ着けてやる

「くそ。なんであいつは逃げる時だけ、走るのが早いんだ……!」

「!」

「おう！！ 坊主、今日も親子喧嘩か」

「おや、タツちゃん。 どう？ 今度家で、食事しない？」

「龍二さんの息子か。 親父さん元気か？」

市場へいくと、店の人や行きかう人たちが俺に話しかけてくる

ふっふっふ、人気者は辛いですな」

ま、とりあえず夕方までここら辺で時間でも潰そうかな

まだまだ俺の歳じゃ、戦にも出れないし……。早く暴れてえなあ

「うえ〜ん!! とし〜、まつ姉ちゃん〜。何処〜!!」

「……………ふ、まだ餓鬼か」

俺に話しかけるには、まだ十年遅いぜ

中心で泣いている女の子を無視して、そのまま足を進ませる

「ひっぐ……………」

「……………」

「うう、人が大勢だから……………わがんだいよ〜」

「……………」

神よ、俺は今試されているのか？ 出来れば、5文字以内に答え
てくれ

『はいそうです』

おいしい!! 6文字だったぜ!!

あ、あの時は……親父と喧嘩して家出して何れは探しにくるだろうと思ったが、夜中まで誰も探してくれなくて目から冷たいのが出ただけだ!!

「……………」

「止めて!! その冷たい目線止めて!! そうだ、俺も探してやる!! いいか」

「え……………うん、ありがとう」

なんとか話題を変えたな

「ほら、逸れないように手に掴まれ」

「う、うん……………／＼／＼　ありがとう」

手を取り合って、女の子の保護者探しに!!

まあ、簡単に見つかるとは思わないがな……………

「何処にも居ないな……」

「うん……」

悲しい、つか話題が見つからん

あれから3時間ぐらい探したが、やはり都会。人が多すぎて、全然見つからない

とりあえず、草原が生えている丘で一休み

「……ん？ どうした、迷子だったのにニコニコして」

「いや……なんか、こんな楽しいの久しぶりだな〜って」

「そうか？ お前も俺ぐらいなら、遊んだりしているだろ」

俺なんか、毎日ハッピーライフですから

頭じゃないよ？ 生活がだよ？

「アタシ……そんな友達居ないんだ。親もいっつも忙しくて、遊んでくれるのはトシやまつ姉ちゃんだけ」

「一人悲しいな〜『ギラ！』すんません」

この子、めつきめつちや怖！？

「けど、こんな楽しい一日は久しぶりだ。ありがとう」

「……………俺は桐生 竜間だ」

「え？」

なにホケテんだ

「テメエも名乗れ」

「！？ あ、アタシは前田 慶次！！／／／」

そうかそうか、君がああ『花の慶次』と呼ばれている人が〜

凄いな……それ……は？

「ええええええええええ！！！！！？？？ お、お前が『アノ』！！！！？？
け、けけけけけけ」

「け？」

ど、どうしよう……頭が混乱して言えない！！

俺は指を慶次に指しながら、フリーズしていく

「けけけけ

二人の影が俺にとび蹴りをかまし、俺はそのまま吹っ飛んだ

「いや、すまん。慶次を助けて、こんな怪我をさせてしまって」

「いや、もういいんで。子供保護団体には黙ってますよ」

「「「?????」」」

よく考えれば、俺はまだ子供だから何してんだこの二人ってなる
よな

たく、こんな破天荒だったか？ この二人

「じゃあ慶次、帰るぞ。家に帰ったら、まつのご飯でも食べよう！」

「ほら、行きますよ」

「……………」

慶次は俺の所に寄り、頬を赤く染める

なんだ？ 惚れたか？ だが、俺にはまだ十年……

『チユ』

「「「！！！！？？？」」」

「竜間：／／／ その話、考えておくね／／／」

俺の頬ではなく、唇にキスしてきた

「じゃあね／／／」

慶次は前田家と一緒に帰り、俺はそのままぽつんと突っ立っている

な、なんだこの気持ち……………！！こ、心地よい……！！

そのまま5時間ぐらい、俺は肩を抱き合い皆から気持ち悪いという目線を食べらった

第一幕 俺が転生した所はかなり強者！？（後書き）

感想をください

第二幕 親父から離れて三千里！？

「うおおおおお！！！！？？ 着火！！！」

「待てええええええ！！ またサボるのかー！！！！？？」

「聞こえない！！！！ 俺には聞こえない！！！！！」

今日もまた俺は親父の鬼修行を脱出した！！

新たな技、『着火』。親父対専用技であり、脚を着火のように一気にスピードを上げ、差を広げるといふ奇跡的に出来た技

たぶん親父は最近修行サボっているから、市場にも来るだろう

なら、久しぶりに外に出ようか？ 賊なんて逃げればいいっしょ
！！

「いざ、天 へ！！！！」

スピードを上げ、俺は京から出た

「ふはははは！……！ 此処は何処だ！……！……！……！……！」

笑ってはみたが、何処か知らない村へとついでしてしまったわい！
どうしよう、マジで何処！？ 必死に逃げたから、マジでわかん
ない……！

北に向かったのか、南に走ったのか……

まあ、どうにかなるか

「さあて、なんか田舎っぽいな。まさか、忍の里なわけないよな
く……！ ないない……！」

家も古く、田んぼが広い田舎

俺は自分で言い聞かせ、とりあえず前へ進む

「ねえーかすがちゃん。忍者遊びしようっ？」

「佐助、まだ私たちは忍者ではないから、そういうのは止めないか」
……………どうやら、忍の里らしいですね

前に歩いている女の子二人が話しながら、忍者の事を言っている
何処かで見たとような感じだが、とりあえず此処が何処だか……

「あのう……」

「「！！！！？」」

『ビュン！！』

うわゝ、話しかけたぐらいで消えたよ

なんだよ！！！！ 俺がブサイクだからか！！！！ イケメンならいい
のか！！！！？

世の中平等なんて、俺は信じないぞ……

「ちつくしよおおお！！！！ 意地でも探してやる！！ 待つてろ、
この 共——！！！！」

全力疾走し、さっきの二人を探す

????side

うわゝ、何だあいつ

里の者ではないよね……？　じゃあ、他から来た人かな？

俺様たちは木の枝を使って移動し、とりあえず逃げている

「かすがちゃん。とりあえずどうする？」

「そつだな……」「うおおおおおお！！！！」「！？」

声がだんだんと近づき、もしやと思い下を見た

俺様たちに追い付いてる……凄い脚力

さっきの男の子だった

「待てー！ー！ー！！！！　俺、そんな悪い奴じゃねえから！！！！？？
ちよつと！！　ほんのちよつとだから！！！！？？？？」

「ちよつとつてなんだよ！？」

「うるせえええええ！！！！　いいから止まれ！！　お願い！！！！」

怪しすぎるよ!? 逃げなきゃ!!

速さを増し、男の子から差をつける。これでなんとか……

「なめんなよおおお!!! これでも一応、女子の下着を見たく鍛えた脚力を————!!!」

「「本物の変態じゃん!?」」

「変態じゃねえ————!!! 俺は桐生 竜間だ!!!!」

名乗っているけど、変態に名乗るわけないじゃん!!!

もっと、もっと!!!

『バキ!』

「へ………?」

「!? 佐助!!!」

脚に力み過ぎて、枝を思い切り折ってしまった

しまった………!? やばい、この高さから落っこちたら、さすがに俺様でもヤバイ

「!?!?!?」

竜間 side

なっ!?! 糞、めんどい事になった!!

女の子が枝を折ってしまい、今まさに落ちている

糞おゝ!!! 考えている暇はねえー!!--!!

「うおおおおおおお!!! キヤツ!!--!! チ!!--!!」

「ほへ///?」

木と木を使つて渡り、女の子をキャッチした

はあ……こんなの、中級者向けだ。失敗したら、どうなるか

そのまま地面に着地し、女の子を下す

「大丈夫か?」

「え……えと///」

「怪我はねえか? すまんな、変な所触ったか?」

「あの…/// 俺様、別に///」

女の子は困惑して、俺の質問に答えていない

しぐさは可愛いが、大丈夫か?

「佐助!!!?? 大丈夫か?」

「……おつとすまん。んで、大丈夫か？」

「う、うん…／／／」

「すまん。最初は変質者と思って逃げてたんだ」

「うん、正直だね君。嫌いじゃないけど」

俺の第一人称って、そうなんだね

「俺の名前は桐生 竜間だ！！ よろしく」

「私がかすが。一応この里の見習い忍だ。そして……」

「わ、わわわわ／／／！！ 私は／／／！！ さ、猿…／／／
飛、佐助／／／！！ よ、よろしく／／／」

「（私！？ 一人称違うぞ）」

こ、怖いぞ。急にどうした、猿飛さん？

とりあえず握手、さっきの道へと戻った

「サンキュー！ 今日楽しかったぜ」

「ふん、まあ私も楽しかった。また来てもいいぞ」

仲良くなったのでかすがちゃんは、さっきの性格とは違うね

もう空はオレンジ色。カラスも鳴いている

「じゃあなー!」

「あ、あの／＼／＼!」

「ん? なんだ?」

さようならしてカッコ良く去ろうとしたが、佐助に呼び止められた

「ま、また会えるよね／＼／＼!?!?!? 絶対に」

「ああ。じゃあな、佐助」

「／／／／／!?!?!?」

結構時間は経つが、走って帰るか

脚に力を入れ、俺は風の如くこの場を走り去った

佐助 side

なんたる俺様、なんか変な感じ／／／

胸が暖かく、忘れられない顔：／／／。頭がボーとする

桐生 竜間：／／／

「はぁ：／／／」

「?????」

第二幕 親父から離れて三千里!?(後書き)

感想をください

第三幕 虐め、カツコ悪!?

「まあああああぬうううかあああ!!! 竜間あああ!!!」

「はい、このパターン!!!」

いつもの如く追いかけています!!

めんどくせえな……、あの髭親父。行動自体めんどくせえな

もういいやん!!! いつもこのパターンとか正直あきね? 飽きるよね?

だから

「はい、また遊びに来ました!!」

「また来たの……」

「来ちゃったぜ!」

「言い方変えても来たのね!」

やはりここはいい

俺が今居る所は、察しているかのように忍の里

つか、もう毎日遊びに来ているね!! うん、暇人だから

「誰が暇人じゃボケエエエエエ!!!!!!!!!」

「「どうした急に!?!」」

まあいい。とりあえず楽しむか

「んで、今日は何して遊ぶ? お医者さん遊びか? 『君、此処が悪いのかね?』 『先生!!! あ、そこは……』」

「佐助、なんでお前はこんな奴に……」

「アハハハ。わかんない」

その後も一人劇場を演じていると、ある男の子たちが俺たちに近づいてくる

顔は悪そうな顔で、視線はかすがに向いている

「お! かすがじゃねえーか!!! どうよ、最近」

「……………」

かすがside

チツ、今相手にしたくない奴らと出会ってしまった

「お前、そういえば最近佐助と里以外の奴と仲が良いって聞けぞ?」

「それがどうした? お前らには迷惑かけてないだろ」

「ああん！？ テメエ、異国の髪色しやがって！！ この、疫病神が！！！」

「長もお前は『呪われた子』って言ってんだよ！！ 消えろよ！！」

疫病神、呪われた子

それは全て、この金色の髪の色だ。私は元からそうだった

母も父も私も気味悪がれ捨てられ、いままで一人で生きてきた

悲しく絶望し、ある日は死のうと思ったこともあった……だが

私の隣に居る二人に視線を向ける。そう、こいつらのお蔭だ

こんな人生が楽しいなんて、初めての感覚だった。佐助に出会い、そして……

竜間、お前に会ったんだ

「無視すんなよ……仕方ねえ、お前『達』には痛い目にあってもらうぜー！！」

「達……？ 達だと！！ こいつ等は関係無い！！！！」

「疫病神とツルンデいる奴らだ！！ 駆逐だ！！」

酷い！！ 佐助や、竜間も関係ないのに……

佐助を後ろに下がらせ、クナイを構える

「じゃあ……！ まずお前「フィー」

「バー」

「！！！！！！！！」「ドゴー」「ぐはっ！？」

拳が当たろうとした瞬間、奴の横から光のような速さで奴の横っ腹を『あいつ』が蹴った

蹴った相手はそのまま吹っ飛ばされ、脚をトントンと汚れを拭くように叩いている

「たくよあー、めんどくせえなおい！！ せっかく、俺の劇場を今披露している最中なのに……！！ しかも」

だんだんと重いを上げるように進み、奴らはその迫力に押されている

「何俺の……俺のかすがに手え出してんだ！！??？」

「「「ええー……！！??」「」」

「／／／／／！！??」

竜間 side

ヤツベエ……！！ 今、友達って言おうとしたのに、何か凄い事言っただよ！？」

俺『の』ってなんだよ！？ 何で俺はこうダメなんだよ！！！！！ 友達って言おうとしたのに……

本番弱いなあ〜

「お前変態か!?!」

「変態じゃねえー!?! 桐生 竜間じゃー!?!?!?!」

『ドン!』

俺を怒らせたな!? 泣かせてやる!!

俺は親父対専用技の『着火』を発動し、一気に虐めっ子の奴らとの距離を瞬間的に縮める

「この!?!」

『スカッ』

「くらえ!?!」

『スカッ』

「(上手い!?! いや、凄い! 一気に縮めたはずなのに、あんな避け方するなんて。しかも、早さは佐助より……。私と佐助の脚の速さは若干佐助が上だ。だが……。しかもあの動き、まるで忍者だ。ていうか、何ださっきのお前が言ったことノノノ!?!?! 何故だノノノ!?! この熱い気持ちはノノノ!?!」

たく、こちとらあの親父と毎日稽古してんだ

お前らみたいな遅い拳、俺には余裕で見えるね。よし、これからこの特技を俺の長所として書こう

「ドゴー！ぶっ！」

「なっ！？『ドゴー！』くそ……！！」

ふん、こんな奴ら俺の敵にすらならないぜ

奴らは腹を殴られゆっくり倒れていった

「ふっ、やっと隙見せてくれたよ。ああ、俺疲れた」

「言っておくが、これは俺のセリフじゃねえ！。佐助だ」

「人任せめ……！！！」

だって、避けるのは得意だけど攻撃するのは苦手だもん！！

「まあ、今回も色々ありましたね？」

「お前が言うか……」

「今日も楽しかったよ!!」

虐めっこ達を退散させ、いざ遊ぼうとしたらもう帰らなくちゃいけない時間

「ナハハハ……。かすがちゃん、一言言っただけかな？ さもないと、俺今回良い事言っただけだから……。主人公として不安なんだよ」

「くだらん事だろうが、耳は貸してやる」

厳しいな、けどそれでもいいや

かすがちゃんの手を握り、目を見つめる

「辛いときとか、悲しいときとかにさ？ 俺や佐助を頼ってくれないか？ もう、一人じゃねえんだから」

「ノノノ!!?? た、竜間ノノノ!! そんな事言っただって、私はお前なんか振り向かないからノノノ!!」

「竜間……!!!!」

ありや、何か知らないが怒らせちゃったみたい

この後の展開が何故か読めるな、仕方ない……

「これにて退散!! じゃあな」

「コラ!!?? 待たないか!!」

「竜間——————!!!!」

たぶん、もうお前らと会うことは当分ないだろ

大人になったら見てるよ？ 俺がイケメンになって、強くなって
……認めさせてやるんだから

かすがside

たく……風のように去っていくなあいつ

私はさっきまで竜間と握っていた手を片方の手で温めるように、
包み込む

「はあ……／＼／」

甘い吐息を出し、奴の背中を何故かずっと見つめていた

俺『の』か……／＼／

第三幕 虐め、カツコ悪!?(後書き)

竜間

「何捏造してんだゴラア!! かすがちゃん可哀そう!?!」

貧弱

「ええ、これを読んでくださ皆様!! 誠に申し訳ないです!
!」

竜間

「おい……謝るのがいいが、無視すんな」

貧弱

「タグにも『捏造』と書いておくんで、誠にごめんなさい!」

竜間

「ねえ、無視しないで!! 俺泣いちゃうよ!?! いいの!?! 俺
の涙は毒なんだぜ?」

貧弱

「ああ、おまえの顔はまさに毒だ」

竜間

「ひど!?! もういいよ!?! 本日お開き!! また見てくれよ」

貧弱

「感想をぜひくださいませ!」

第四幕 地獄修行！？

俺の名前は桐生 龍二。桐生家を纏めている総大将である

『最強』と言われている桐生家なのだが、それが今滅亡の危機に
貶められている

俺の息子、桐生 竜間のせいで

奴は俺ら代々で受け継いでいる『恵まれた体』を用いていなく、
いっつもぶにやけるダメ男

幼いくせに、難しい言葉で愚弄する

だが俺は竜間の事が嫌いではない。奴は己自信を磨き、我が道を
進む男

俺はわかっている。奴は他人には優しく、己にはキツク……

だが、残念な事だ！！ 俺はとても悔しい！！

竜間には熱い魂が無い！！ あの虎、武田信玄公と同じくらい熱
い魂があるんだったら……！！

「はあ、今日も道場に居ないだろ」

一応ため息をつき、道場の目の前で先の展開を読んだ

いっつも遅れては逃げる奴が、今回も来ないだろう

『ガラガラ』

「!!!?? な、ぬぁに!!!??」

だが、俺の予想は反転した結果となった

竜間が道場の中央で、瞑想をしておるのだ!!! 座禅を組み、目を瞑って耳にかすかしか聞こえない息

か、完璧じゃ!!! 俺は今、感動しておる!!!!!!

「竜間!!! ついに……ついに!!!」

「……」

「今日は赤飯じゃ!!! いや、豪勢に行こう!!! のお、竜間!!!」

「……」

「竜間……」

こんなに叫んでいるのに、竜間はいまだに目を開けない

しかも口を開いているが、何も喋らない

まさか……

「……にへへへ、俺はーれむ……」

「竜間あああああああああああああああああああ………!」

奴は眠っていたのだ

「竜間よ、お前は何故ここで寝ていた」

「す、涼しくてつい……」

「竜間よ、お主には魂がないのか!?!」

竜間を正座させ、仁王立ちしている俺

嘆かわしい!?! こんな奴が、桐生家の跡取りなぞ……!?!

「竜間よ!?! お主には、桐生家を背負うという願望はないのか?」

!?!」

「ねえ。つか嫌。絶対やだ。なんで俺がむさ苦しい集団のドンになんなきゃいかねえんだ」

「お、お前……」

我らが『恵まれた体』を、むさ苦しいだと?

ついに俺もキレたわい。これじゃ、我ら先祖代々が侮辱されている!?!」

俺は此間まで考えていたのを、ついに結論を出す

「竜間!?! お主には、今から『地獄修行』を行ってもらおう!?!」

」!」

「あん！？ んだよそれ！？」

「『地獄修行』、それは俺ら代々『恵まれた体』を完全に作るために行く『地獄修行』。俺もやった修行だ。お前にはそれをしてもらおうと思ったが、特別に俺が用意した『地獄修行』を行ってもらおう！！」

懐から何枚かの紙を竜間に渡した

それぞれ順番通りに書いてあり、竜間は開こうとしている

「まだ開くには早い！！ では、行ってまいれ！！ そして文を読み、その目的の場所に向かうのだ！！」

「なっ！？ というと、俺は旅に出るのか！？」

「俺らを昔から雇ってもらっておる大名たちの元で、お前はそこで修行するのだ！！ 大名たちからの使命を果たしたら、順番通りに次の紙を開き、次の修行場へ行くのだ！！」

竜間は嫌そうな顔をしだし、もうめんどくさそうな体制をとる

そうかそうか、そんなに嫌なのか……

「行ってこんど、お主の性癖を暴露「行ってきます！！ お父様！
！ お母様によろしく言っておいてくれでございます！！！！」」

竜間はすぐさま荷物の支度をすまし、外へと出て行った

竜間よ……今度会おうたら、お主は俺を超えているはずだ。頑張れ

竜間 side

くそ、めんどくさい事になった!!

「親父め……。まあいい。最初の修行場は何処だ？」

きと書いてある紙を開き、中を読む

「『最初の修行場は俺と昔からの仲の、九州の鬼島津の元だ』……
はい!? あの、本田忠勝の宿敵の……鬼島津だと!？」

嬉しいような、悲しいような……

けど……

「仕方ねえ。大暴れするためなら、俺はその壁を越えて見せるぜ!

！ 見てろよ、糞親父！！」

おまけ

「お！ こりゃあ驚いたわい。まさかあの桐生のせがれが、オイの所で特訓とは！！ ぶわっはっはっはっはっ！！ こりゃあ、面白か！！」

第四幕 地獄修行！？（後書き）

感想をできればください

第五幕 鬼対変態！？

「ついた……はあ、はあ。み、三日三晩走り続けて、やっと九州に着いた……」

膝に手をつかせ、息を荒く呼吸をし始める

親父の試練から俺は三日間寝なずに走り続けたんだぞ！？ 偉いだろ！？

めんどくせえ……なんで最果ての日ノ本まで……

しょうがねえ、とりあえず島津さんに会つとするか

「すみませーん！！ 桐生というんですけど、島津義弘って居ますか？」

「あなたが桐生殿ですか、大将なら鍛錬場に居ます。お急ぎを」

「あざっす」

鍛錬場か、こんな朝早いのに俺より偉いじゃねえのか？

つか何だろ

すんげえ嫌な予感がするんですけど

兵士さんが指さした場所に足を運ばせた

「おお、おまはんが桐生のせがればいか。オイは島津義弘じゃ。ま
あ、よろしく頼むね」

「あの〜」

「おまはんの実力をしりたいけん、準備はいいけ？」

「すみません、自分は何も悪い事していなのに何でアンタと戦わなきゃあかんねん!？」

鍛錬場では俺と島津さんがおり、周りを囲んでいる無数の兵士

率直に言おう、無理です。勝てません

ドラゴン ー ル的にいうと、まだ子供時代の悟 がフリー 完全
形態を戦うくらい無理なんだけど

別にこれは勝ち負けの勝負じゃねえのはわかるよ？

けど、修行する前に俺は昇天しちゃうから!？

「そんじゃ、行くかね!!」

「ぎゃああああ!!!?? 突進してきたのが美少女ならいいけど、すんごい怖いおっさんが突進してきたー!?!」

「おまはんひどかね!？」

島津さんは大剣を軽々持ち上げ、俺に距離を詰めてくる

早い……!?!?

「そおい!?!」

『ゴホン…』

「!? あぶな!?!」

間一髪、振った大剣をギリギリで避けきれた

前髪が数本斬れたが、これでわかったのが……

島津さんはマジだっつーのが、良くわかった

「(ほほお、この大剣の斬撃をギリギリで避けよったわい。目がい
いのか……あるいは)」

「くっ……!! けど、俺は無敗伝説を築くのが夢なんでね?!!
まあ、本気を出してやるか!」

拳に力を入れ、脚は自然体の構えに

伊達に毎日親父と修行しているんだからな!! 負けるわけには
いかねえんだよ

「ほお! これは面白かになりおった!! なら、オイも本気でや
らせてもらうばいね!!」

『一刀必殺 島津義弘 出陣』

「!? お、おい! あんたの後ろになんか文字が見えたぞ!?!」

これって、ゲームで出るアレじゃねえのか?

なんかカッコいい四字熟語で、なんかアレ的な……

「!?!? おまはん、もしかして……婆娑羅者か?!? こりゃあ、驚いたばい!?!?」

「え、何その言葉?!? この世界には、こついうのがあるのか」

「なら、鍛えがいがりそうだわい!! この一太刀、避けられるけんのう!」

島津さんは何かを溜めている

まさか、ゲームででる技か?!? ええと、たしかこの状況の場合この技かな?

頭ごつちゃになってきた!!

「『示現流 撃冒』」

「たしか前転からの一刀両断!?! 横にさければいい!! 『着火』」

『ドーン!! ビリビリ』

当たる瞬間に『着火』を発動し、横へと瞬間的に避けられた

あぶねえ、ゲームしててよかったわい

「!?!? 何処かね!?! 桐生のせがれ!?!」

え、まさか見えていなかったのか?

あんなに俺は島津を見ながら避けてはずなのに……俺の脚、だんだん早くなってきた

「こつちつスよ、島津さん」

「そんな所におったかいね。おまはん、忍者になりたか？」

「いや、女子の下着を見たく……」

「何か悲しか！？ あの桐生のせがれとは思わん！！ けど、桐生を超える者と見たけん」

最後は聞こえなかったが、何かやる気をさらに出したようだ

しょうがねえ、避けて避けきって体力が無くなったら攻撃開始だ
！！

「うおおおおお！！！！」

「行くぜええええええ！！！！『ビリ』え……」

脚を動かそうとしたが、全く動かずまるで麻痺しているかのように

麻痺……電撃！？ そうか、しまった！！

さっきの技でギリギリで避けたから、あの時の電撃が俺の脚に当たったんだ！？

前を見て、島津さんは大剣を握って突進してくる

「ちょ！？ タンマタンマ！！？？ お願い止めて！！ 今度、春
本（エロ本）上げるから、攻撃ストツ『ドツカ ン！』『』」

「うう……島津さんのバカ」

「す、すまんかと。久々に骨がおる奴けんと戦ったから、ゆづこと聞かずに」

「……んで、俺の試練はなんスか？」

鍛錬場で俺は横たわって、口しか動けない

全身真つ黒状態の、ちょっと変わったイケメン風ハンバーグだよ

「そうかね。じゃあ、おまはん「竜間でいいつスよ」なら竜間、おまはんには婆娑羅者としての力を覚醒するまで、此处に居てもらおうけんの。じゃあ、よろしくね」

「……当分、京には帰れなさそうだ……」

俺の知らない言葉、『婆娑羅者』

やはり、臉に一発ぶん殴らないと気がすまねえ……！！

第五幕 鬼対変態！？（後書き）

感想をください

第六幕 餓鬼侍!?

「だらっしゃーーーーー!?!?!?!?!」

「ふん!」

『ドーーーーン!?!?!』

あれから数ヶ月の時経った……

まあ、毎日? ほとんど、島津さんと試合だけだね

うん、正直辛いね!

試合じゃなくて、島津さんのせいで漢字変換されて死合いだね

「糞ーーーーー!?!? なんで俺だけこんな目にー!?!?」

「竜間! オイを見、考えろ!! せえーーーーい!」

『ドーーーーン!?!』

そんな事言っただってね!? 勝てるわけないっしょ!?!?

島津さんの大剣を避けながら、俺は心の中で訴える

仕方ねえ!! ついに、ついにこの必殺技を使う時が来たか!!!

「島津さん、俺の必殺技見てくれよ!」

「ほお。来いか！」

島津さんは防御体制に入り、俺は脚を地面に慣らせる

「行くぜ！！ つい先日、厠の中で考えた技を！！」

「なんかシヨボっぱかね！？ つか、考えるの早ばい！？」

うるせえ！！！！ 脚を曲がらせ、そして

『シユン』

「！？ な、なんかね！？」

「『『『『『さあ、何でしょうかね！！！！』』』』」

島津さんの周りを高速移動し、残像まで出ている

これこそ、俺の超・究極奥義の！！！！

「『高速』！！！！」

「……………そのまんまかい！！！！？」

とりあえず、『着火』の進化版だね

けどさあ……………いや、ツッコミ入れてくれるのはいいんだけど

「これ、かなり……………はあはあ、つ、疲れるんだよね」

「意味なか！？ 何がしたかったね！？」

「い、今の状態を何かに伝えたくて……はあ」

そのまま地面に倒れこみ、熱い太陽の日を背中から浴びてる

そして、毎日の行事みたいに

「ほい、オイの勝ち！！！」

『ドーーーーン！！！！』

「はい、いつものパターン！！？」

遙か彼方に、ランデブーしに行きました

「ああ、ただいま戻りました……」

「今回は早かったね」

糞、この糞マツスル爺が……！

丁度したが柔らかかったのが幸いだったが、マットになってくれたのは熊さんだぞ……！

泣きながら帰ってきたわ……！！

けど、そんな事を目の前の鬼には言えなく、俺は仕方なくしゃがみ込む

「あはははは……！！　じ、じっちゃん！　なんだよコイツ？　面白すぎるぜ……！！」

「これこれ、辨助。笑たかいかんばい」

島津さんの隣に、俺より小さい女の子が俺を指さしながら笑っていた

な、なんだコイツ……！？ 人を笑うなんて

「お、おいお前！！ そんな笑うなんて酷いじゃねえーか！？ しかも、指で指すな……！！」

「あ あ！？」

「すみませんでした先輩……！！」

「残像が出るほど、早か土下座ね！？」

何この子！？ 根っからの不良なの！？

俺は反射的に、子供に土下座してしまった

「じゃなくて、お前女のくせに何その言葉づかい！？」

「！？ う、うるせー！！ 死ぬ！ 変態！ バカ！！ アホ！！」

「なめんな餓鬼！！ 俺は前までは皆にそれ以上の侮辱な事言われているから、そうそう簡単に凹むわけねえだろ……！！」

「ならその手に持っている石を、辨助に向けるな！？」

ムカつく……！ とりあえずムカつく……！

またも反射的に石を持ち、餓鬼に投げようとしてしまった

だが、俺は大人だ！！ そんな言葉で、俺が怒るわけねえし

「うー」

「……はい？」

え、今コイツ何て言った？

俺最近耳が悪くなったかな？ 耳を指でかき回し、もう一度聞いてみる

「うー、ちー、屑、女の大敵」

「うー……自分、小さい小石になりたいです」

「落ち込む度どんだけね！？ これ辨助！！ それ以上言ったら、オイは許さないばい！」

う、生まれて初めてだよ……こんな気持ち

地面に手をつき、土を強く握り、目から何かが流れる

ああ、気持ちがだんだん重くなってきた

「えー、だってこいつのせいだもん」

頬を膨らませて、島津さんに訴える餓鬼

そうか……テメエがそこまでしたんだ。文句はねえよな？ な？

ふらふら立ち上がり、目元が真っ暗になりだす

「こっぴなったら……戦争だ!!」

「何で!?!」

「おう、いいぜ!! 最初に言っておくが、俺様最強だぜ!!」

「辨助も!?!」

餓鬼は着物の中から出した木の枝を何処からか取り出したが、今はツッコム気にもなれねえ

俺も脚を自然体に構い、準備万端に

「「うおおおおおおお!!!!!!」」

「怪我だけしないで!?!」

「ふっふっふっ、餓鬼の分際で中々やるじゃねえーか。今回は引き分けでやってやるっ」

「いや、お前そんな体制で言われても……」

俺は顔を地面に着き、腰が落ちている残念な状態だ

何こいつ！？ つよ！？ あんな太刀筋、何処かで見たことあるし

「へへへん、この武蔵様の敵ではなかったな」

「こら辨助！ まだ元服しておらんのに何勝手に名前を変えているばいー」

「な、なんだとおおおおおおお！！！！！？」

その時俺は思った

かん、なごびかんせき.....

第六幕 餓鬼侍！？（後書き）

感想をください

第七幕 変態の優しさ……ってひどい？

「バーカ！ バーカ！ あははは！！」

「うるせえ！！ 本当の事言っんじゃねえ！？」

「否定するばい……」

稽古増で武蔵は俺を馬言しながら、腹を抑えて笑っている

糞、こいつが餓鬼じゃなきゃ！！

構えを止め、武蔵の所に近づく

「お、何だ。やるのか！？ 女の大敵」

「どんだけ被害妄想なんだよ！？」

「略すと害虫」

「略してねえーし！？ しかも、一文字もなっつてねえー！！！？」

またも腹を抑えて、床にどたばたする武蔵君

絶対強くなっつてやる！！ こいつをボコボコにするために！！

島津さんは一息出し、俺たちに話しかける

「おまはん達、今日は城下で遊ぶかね」

「「え……」」

「今日は身が入らんか。ほれ、行ってこい」

「あざつした!! うっしゃー!! 行くぜ、俺の癒しに――!!」

「なっ!? ま、待て――!!」

「真っ先に城下に通じる道に向かって、猛ダッシュ」

「強くなる? はて、何の事やら」

「武蔵も俺についてき、いざ城下に!!」

「……ふむ、武蔵……良かったかね」

「とつちャー……く……!」

「とつちャーく!」

お互いポーズを決め、城下を見渡す

俺はここん所行ってないからな、なんかワクワクするぞ

「さてさて、まずは何をしましょうかね」

「俺様と遊ぶぞ」

「ヤだ」

手をコネクリ回している途中、武蔵がとんでもない発言してきた

なんでテメエみたいな、可愛くない餓鬼と遊ばなくちゃいかなん！！！！

そっぽを振り向き、脚を進める

「そこら辺の餓鬼と遊んどけ。ほら、その田んぼの近くに居る餓鬼共と」

「うう……………もういい！！　バカ！！　死ね！！」

だから、俺はそんな挑発に乗るわけないじゃん

耳を傾けず、脚を止めない

「お前って……………成長してんのか？」

『ブツチン！』

はい、この子タブー言っちゃったよー！！！！？

俺だって、好きで弱くなりたくねえんだよ……………！！！！

「ッ！！　もう知らねえ！！　じゃあな！！」

『シユン』

『高速』を使い、武蔵から遙か彼方まで離れるぐらい走った

本当、可愛くねえ！！　素直になりやがれ！！！！

.....

「おら、ちゃんと掴まれよ?」

「うん……」

その手を俺の手で握り、武蔵は口が笑んでいた

「と、とりあえず近くの座れる場所で話聞いてやるから? な?」

「うん……その茶屋がいい」

「ああ、あそこなら俺の知り合いが居るからな。行こうな」

城から一番近い茶屋

同じ歩調で歩きながら、俺たちは茶屋へとゆっくりと向かった

「……んで、何でお前は同年代と遊ばねえんだ」

「……俺様、わかつたんだ」

隣で団子を食べている武蔵の顔が、一瞬にして真剣へと変わった
手に持っているお茶が、一瞬揺れて感じだ

「俺様さ、他の子とは違うんだって……じつちゃんが言った。『
婆娑羅者』だって……この力さえあれば、盗賊なんてあつという間
だぜ?」

「ふ〜ん……俺もそうだぜ」

「……だから、嬉しかった」

団子を食い終わり、串を皿に落とす

「同年代に近いお前が、俺様と同じ『婆娑羅者』だって」

「そうかい」

「俺様、いままで友達が居なかった。けど、お前なら……!!」

急に顔を近づかせ、目と目が合う

待て、それ以上言ったら……テメエは孤立してしまう

『……………何で、俺だけ』

!?!? 糞、何でまだアレを覚えているんだ……

武蔵の両肩を掴み、今度は俺から顔を近づかせる

「いいか弱虫」

「よ、弱虫!? 俺様、弱虫じゃねえー!!」

「うるせえ弱虫。そんなに友達が欲しいなら、言えよ。さっきみたいに、素直に可愛い女の子みたいに」

「///!? む、無理だよお……」

よわよわしい無彩の姿

「無理じゃねえ！！ 進むんだよ、進んで進み続けて……いや！
自分の心で……！！ 何事にも動じるなよ？」

「……………わかった」

……って、何熱く語ってんだよ俺！？ 俺のキャラじゃねえ……

けど、何故だか嬉しい……かな？

鼻の下を指で擦り、横目でお互い見つめ合う

「……………へへっ」

「……………ふふっ」

何故だか、腹の底から笑いが込みあがってくる

「あーそぶ人は、この指とーまれ！！」

目の前では小さな餓鬼……男の子が中心となって、子供たちを集めている

次々とその指に触れ、子供たちは次第に多く

「……………俺様もやるぜー！！！！」

武蔵は駆け出し、指に触れた

子供たちは武蔵を一斉に見出し、男の子が口を開き

「いいよー!」

「!?!?! うん!」

本当、可愛い所もあるんだよなあ

..... ああ、まあ

「やるか」

「ほお、おまはんから挑戦来るなんて……明日は雪ばい」

夕日が俺たちを照らしている

影はだんだんと伸び、俺の影は島津さんとくっ付いている

「なあに、ちよいとわかつちまったんだよ。自分が何するか」

「……まあよかよか。さあ、試合かね！！！」

島津さんはヒョウタンに入っている酒を飲みほし、大剣を構えだす

俺はよお、大暴れもしたんだけど……何でこつ気づかなかつたかなあ？

毎回ゲームとか漫画読んでいるのに、俺も素直じゃなかったかねえ？

「さあ、来い！」

「俺、ずっと……ずっと……と……!!!! アンタ等に憧れて
いたなんてよ……!!!!……!!!!?? ふん……!!」

『ガキン……!!』

自分の武器を島津さんに思い切り叩きつけたが、大剣で防がれて
しまった

「なっ!? そ、それは……!!!!?」

「んじゃ、行きますぜ……!!!!……!!!!」

俺にだって、最後の本気ぐらい見せるんだよ!!

こんな所で立ち止まるかよ!! 行くぜ、この修行……クリアだ
――!!!!……!!!!

『……!!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5036z/>

戦国basara！？ いや、けど性別が.....

2011年12月29日03時39分発行